現代中国の書家二十人を紹介する連載

中国当代書家二十人

第11回

監修／蘇士澍　中国書法家協会主席
取材・文／郭同慶

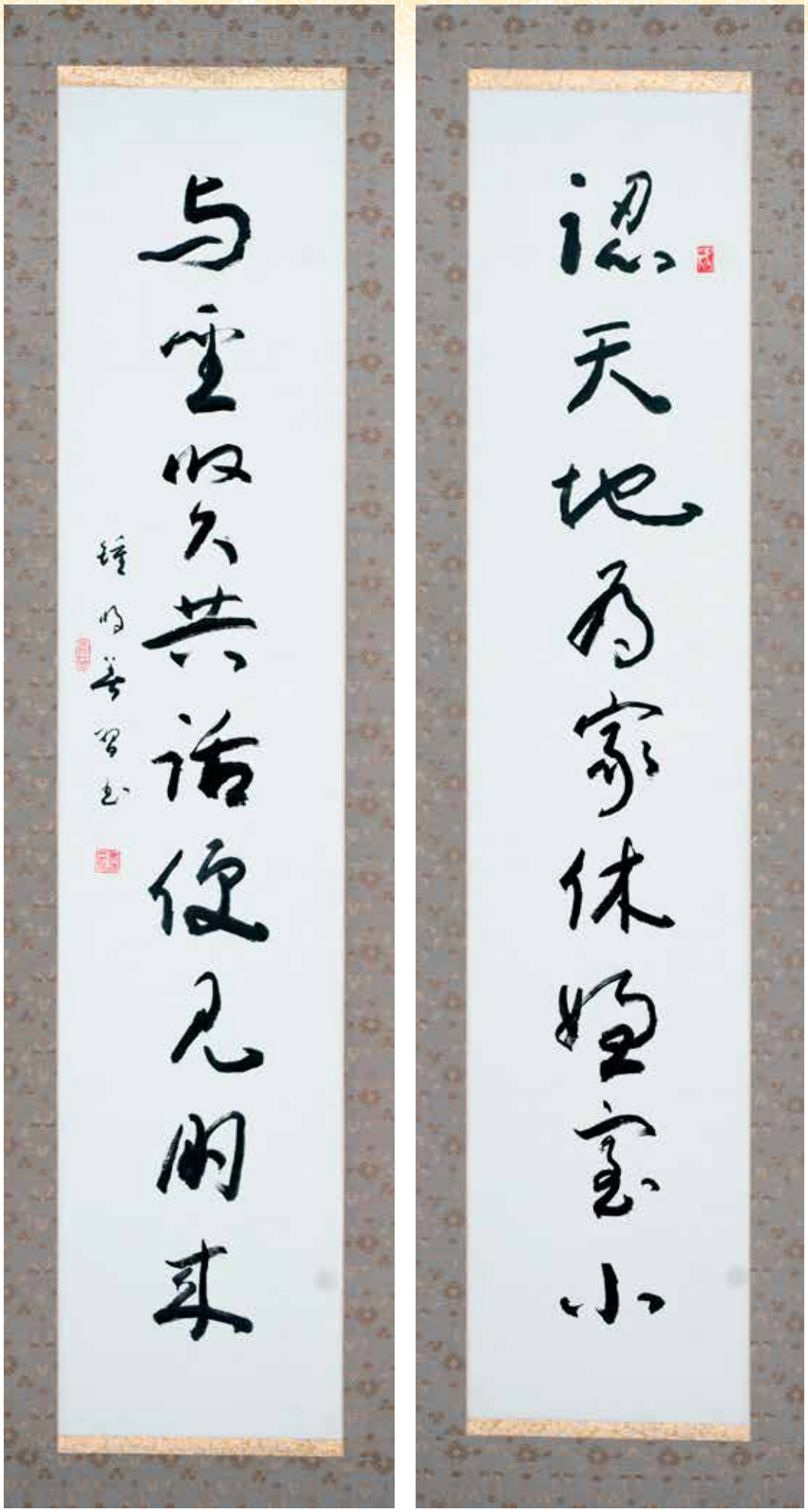
鍾明善

しょう・めいぜん
一九三九年、陝西省咸陽市北槐樹村の農家に生まれた。中国書法家協会副主席、中国書法家協会編集出版委員会委員長などを歴任。現在、中国書法家協会顧問、陝西省書法家協会名誉主席、陝西省于右任書法学会会長、西安書学院院長、西安交通大学名誉教授、西安交通大学博物館名誉館長など。《中国書法史》（河北美術出版社）のほか、《鍾明善芸術世界》叢書（西安交通大学出版社）など、著書多数

咸陽の農家の子供として生まれた鍾明善氏は、画家になる夢を抱きながら国語の教師になり、あるとき、本格的に書の道に足を踏み入れた。書家としてだけではなく、学者として、教育者としても知られる。于右任研究の第一人者でもある。鍾明善氏が住む古都・西安に赴き、郭同慶氏が取材した。

（編集部）

中国当代11.indd 98　2019/10/09 20:16



草書《九言対聯》

認天地為家休嫌室小　與聖賢共話便見朋來

中国当代11.indd 99　2019/10/09 20:16

名教授・中国書法史学者 鍾明善

学者・書法家・教育者

残暑が残る九月三日午前、上海虹橋駅で時速三四〇キロを超える「高鉄」（中国版新幹線）に乗り込み、一四四七キロ離れた西安まで五時間ほどで奔馳（ほんち）し、午後の早い時間に着いた。鍾明善教授を取材するため、二十数年振りに古都入りした私を、鍾教授の弟子・祁碩森氏が出迎えてくれた。于右任（うゆうじん）研究会常務副会長兼秘書長を務める祁氏の車で、まず草書聖人・于右任の記念館（三原県）を参拝した。

九月四日午前、中国書壇の大御所・鍾明善教授の取材は西安交通大学教職員宿舎にあるご自宅で行い、そこには弟子の祁碩森氏、王智傑氏（咸陽師範大学于右任書法学院院長）、並びに同大学「鍾明善教授従教六十周年ドキュメント」取材撮影班も臨席した。

鍾明善教授は著書が多く、学者型書法家、教育者として、日本書壇で最も馴染みある中国の大家の一人である。特に中国の書法史や書論研究の第一人者として、また于右任研究の推進者として各方面より高く評価され、名実ともに中国書壇の大御所である。

鍾明善教授は中国書法家協会副主席、中国書法家協会編集出版委員会委員長などを歴任し、現在は中国書法家協会顧問、陝西省書法家協会名誉主席、陝西省于右任書法学会会長、西安書学院院長、西安交通大学博物館名誉館長などを兼ねている。

作品は北京故宮博物院、中南海（中国共産党中央委員会、国務院の所在地）、毛沢東記念堂、人民大会堂（議会堂）、釣魚台国賓館、中国軍事博物館、西安碑林博物館などに収蔵。日本、韓国、米国、フランス、イタリア、ドイツなど十数カ国に招待され、個展や講演会を開催。中国でも屈指の名教授、書法史家、書の巨匠である。

従教六十周年で名教授へ

交通大学は、東洋のMIT（マサチューセッツ工科大学）と呼ばれるほどの中国の名門大学である。源流は清末に上海に創設された南洋公学で、現在は上海、西安、西南、北京、新竹（台湾）に五校に枝分かれしている。西安交通大学は、上海交通大学の一部の学部が一九五六年に西安に移転して生まれた中国西域のトップ大学であり、現在は三万一千人ほどの学生が在学し、うち博士課程などの院生は約半数に至り、教職員は四千五百人を超える文部省直属の重点綜合大学である。

西安交通大学は、今年九月十日「教師節」の午前に中国書法家協会との共催で「文脈相続——交通大学人文教育文献展ならびに鍾明善教授従教六十周年成果展」、そして鍾明善教授の学術に関するシンポジウムを同大学博物館で盛大に開催し、交通大学の人文教育に関する歴史を回顧するとともに、教職生活が六十年になった鍾明善教授の教学・学術方面の成果を紹介し、また鍾明善教授の書画作品六十点を展示して、氏の業績を讃えた。記念展の開幕式典では中国共産党同大学委員会書記長・張邁曾氏が最初に挨拶し、中国書法家協会主席・蘇士澍氏、中国共産党陝西省委員会宣伝部長・王吉徳氏、鍾明善教授が所属する同大学人文社会科学学院長・李黎明氏らが祝辞を述べた。最後に張邁曾書記長が大学を代表し、高い徳と模範となる行いを讃美する句「徳高為師、行為世範」が刻まれた「従教六十周年記念証書」を鍾明善教授に交付した。中国共産党陝西省前書記長・張勃興氏が開会の宣言をした。このような最高の格式、厳粛かつ盛大な式典を受けて、鍾明善教授は感無量だったようだ。

また午後には「桃李春風——鍾明善教授芸術検討会」と題したシンポジウムが開催された。中書協（中国書法家協会）および各省書協、そして各姉妹校代表が集う一二〇人規模のシンポジウムで、「書法と大学教育」「書法と人品」「書法と姉妹芸術」の三つのテーマにより、鍾明善教授の六十年従教生涯を回顧して業績を讃え、三時間にも及んだ。

百姓の子が名教授へ

鍾明善氏は一九三九年、陝西省咸陽市北槐樹村の農家に生まれた。咸陽といえば中国で最初の中央集権王朝・秦の都であり、漢や唐王朝では京畿地区として輝いた悠久の歴史を持つ。時はまだ中華民国時代、「字は自分の顔になる。男児は必ず稽古するのだ」と〝百姓〟の父親は常に言っていたという。鍾明善氏は四歳より習字の稽古を受けた。先生は二人いた。一人は小学校の教諭で母方の叔父・王樹徳師であり、もう一人は西安の漢方医で、後に文筆が評価され、陝西省人民出版社の編集者になった仲靖哉氏。また父は西安に行く度に、綺麗な楷書や隷書の手本を息子のために持ち帰った。

鍾明善氏は五歳頃から春聯を書き始めた。春節の前には、津々浦々の人家で満遍なく春聯が目に映る。正月に学友と村中を歩き回り、最も良い春聯を見つけ出す。このような伝統文化を重んじる古都の人文的な環

中国当代11.indd 100 2019/10/09 20:16

境の中で鍾明善氏は成長し、咸陽中学校で憧れの校長先生・梁玉堂と出会った。梁校長は于右任翁の弟子で中学校の創設者でもあり、いつも綺麗な六朝風楷書で黒板文字を書いていた。地元出身の師・于右任を「髭爺于」と親しく呼ぶ梁校長を通じて、書の偉人・于右任翁の存在を認識し始めた。

しかし、鍾明善少年は画家になる夢を抱いた。同村には、美術教諭の郭二伯先生が住んでいた。近代絵画の巨匠・劉海粟が創設した上海美術専門校の卒業生で、地元に戻って小中学校の美術を教えていた郭先生の門下からは、梁黄胄のような画伯も輩出し、日本人の藤田澄子などの教え子もいた。鍾明善少年は、近所の郭先生の書斎によく通った。絵画に夢中でなかなか家に帰らず、親が探しに来るほどだった。幸いなことに咸陽中学で郭先生の授業を受けることができた。

高校卒業の際は美大を志願し、入試の美術のデッサン試験の成績も良好で合格することができたが、進路について最終的な意見を父に求めると、「美大は四書五経を教えるのか?」と言い、「教えなければ、行かせない」と。美大行きの夢は破られた。中国では学問の基本になる《大学》《中庸》《論語》《孟子》を「四書」と言い、《詩経》《尚書》《礼記》《周易》《春秋》を「五経」と言う。儒教文化を堅く守る伝統が農村部にも浸透していた。

一九五六年、陝西省師範大学に入学。国文学学部を専攻し、文化大革命の嵐の前だったので、存分に「四書五経」を学ぶ機会を得ることができた。同学部では、まず漢字の起源から学ぶので、自然に書法の勉強にも結びついた。古文字学者・郭子直先生が編集した教材には、甲骨文、金文、石鼓文などが成立した背景や書体の特徴、そして王羲之、顔真卿、柳公権までの歴代の書の変化や革新、代表人物の具体例について、数多く取り上げられていた。大学生の鍾明善青年は、先生が熱く語る書法史や書論は好きだったが、書道にはあまり没頭していなかった。相変わらず余暇には絵を描いた。社会的なニーズがあり、当時は「反右運動」「大躍進生産運動」などのキャンペーンのためのポスターを製作し、また関連の美術展を企画し、地元で展示した後に北京まで招待されたこともあった。担当教授は著名な画家・石魯で、石氏は鍾明善青年の絵や企画の指導を何度もしてくれた。

一九六〇年、陝西師範大学を卒業。西安師範専門校に就職し、その後、陝西省内教育局の管内で、いくつかの学校に勤務。一九八一年、西安交通大学の非常勤講師に。そして一九八五年に正式に同大学の社会学学部の講師になり、同学部学生の選択科目として書法教育の分野を切り拓いた。

鍾明善氏が人生を捧げることになった交通大学は、一九二一年に北京政府が交通部の傘下の三つ大学を統合させた国立大学である。初期は師範学院、外院、中院、上院と四つの学部だった。戦後の緊迫した台湾海峡の状況のもと、国務院は交通大学を西へ移転した。

交通大学は確かに名前の通り理工系だが、歴代学長には張元済、沈増植（筆者の師・王蘧常翁の書の先生でもある）、唐文治、蔡元培、葉恭綽など、中国史にそ

展覧会「文脈相続」の開幕式典の様子。上は、挨拶する鍾明善氏。下は、式典で披露された唐代から伝わる伝統芸能

シンポジウム「桃李春風」の様子。上は、中国書法家協会を代表して挨拶する蘇士澍主席（中央）。右に鍾明善氏

中国当代11.indd 101　2019/10/09 20:16

草書《七言対聯》

風雲龍虎真奇遇　民物乾坤本大同

の名を残す文人や書法家がおり、また卒業生には、詩・書・画・印はもちろん、文学・音楽にまで精通した大家・李叔同（弘一法師）や、元国家主席・江沢民などもいる。

この理工系綜合大学に文系の学院を創設することが、鍾明善氏の宿願となった。有志の教授たちと一体になり、全身全霊を尽くした結果、一九九四年に同大学に人文社会科学学院が創設され、中国書法学部を始め、哲学学部、社会学学部、中国語言文学学部、伝播学部、芸術学部、並びに文化哲学研究所、新聞・伝播研究所、歴史研究所、社会学・科学技術学研究所、文化芸術研究センター、中国西部発展研究センター、日本研究センターなどの学部研究機関を持つ、大規模の学院が誕生し、鍾明善氏は同文化芸術センターの初代センター長に就任した。

書法学部には、「書法基礎」「書法鑑賞」「楷書技法」「行書技法」などの選修項目を正式に設け、書法担当の教授・講師も増員した。現在は毎年度、四年制の書法専攻科学生として十五名、大学院生は六、七名、博士課程は四、五名が入学している。

鍾明善氏は、その後、一九九九年に創設された文化芸術学部の部長に昇格し、書法教育だけではなく、文化芸術の全般に腕をふるった。今年で教職人生は六十周年になり、八十歳となった鍾明善教授は二月二十二日に退官となったが、しかしまだ名誉教授として四名の博士課程の学生の指導が残っている。

この間、二〇〇〇年に同大学より「師表賞」栄誉証書を受賞し、同年十二月に国家教育省より鍾明善教授個人と文化芸術学部が同時に表彰され、二〇〇一年には国務院より、社会に対して「突出した貢献をした専門家・教授（書法）」の称号を受領。鍾明善氏は名実ともに西安交通大学の宝であり、天下の名教授となった。

二〇〇二年、著書《書法基礎と鑑賞》が国家教育省より「全国普通大学用優秀教材」として認定され、その二等賞を受賞した。二〇〇五年、西安交通大学出版社で《鍾明善芸術世界》叢書の編集がスタートし、これまでに《書法の基礎》《行書の技法》《書法の鑑賞》《意象芸術の散論》《長巻三種》《自詠韻語楹聯》《篆刻選》《藝林絮語》の八冊の著書を出版。

二〇一四年五月十六日に同大学博物館に鍾明善芸術研究センターを設置。陝西省文化庁長官・劉寛忍、西安市文物局長・鄭育林、中国共産党同大学委員会書記長・張邁曾、陝西日報社長・鍾順虎などの関係者が開設式典に出席し、祝辞を述べた。

〝百姓〟の子・鍾明善氏は絶えず奮闘し、中国でも有数の名教授となったのである。まさに「桃李（優秀な

中国当代11.indd　102　2019/10/09　20:16

人材）が天下に満ちた」といえよう。

中国書法史を執筆

日本の書壇では、鍾明善教授の名前はよく知られている。《中国書法史》の雑誌連載や日本語版の単行本の刊行のおかげだ。

鍾明善氏は、若い頃に文学や絵画の道を希望していた。時は一九六〇年代。西安師範専門校で国語を教えていた鍾明善氏の趣味は、文学・書画の研究だった。書法との出会いは全くの偶然だった。

一九六三年頃、共産党中央より「中小学校で書写教育を重視せよ」との通達があった。小中学校の教員の育成や研修を担う西安師範専門校の校長は、書画に明るい鍾明善氏を指名し、全市内の小中学校の国語教員を対象として、書法の基本知識を学ぶゼミナールを開催する計画を氏に委ねた。必要に迫られた鍾明善氏は猛勉強し、図書館や博物館を行き、書史や書論を研究し、教材を手作りした。特に参考になったのは、尉天池教授の著書《書法基礎知識》だった。これが、鍾明善氏の書法人生のスタートとなった。

本格的な書法人生は、文化大革命の終了後に始まった。一九七六年、中央で実権を握っていた「四人組」が逮捕され、文革の嵐が終わった。しばらくすると、思いがけず書法の大ブームが到来した。文革で傷つけられた書法文化を再興しようと、各地でさまざまな書法展や書法講座が盛んに行われた。一方、書法に関する手本や教材が不足していた。鍾明善氏が名乗りを上げた。まずは「長安書法函授学校」の設立に加わり、書法の通信教育（函授）を手掛けた。そして《中国書法全集》の編集だ。一九七七年、陝西省人民美術出版社の編集者・鄒宗緒氏の要請により《中国書法全集》の共同編集者となり、数カ月を掛けて陝西省師範大学図書館、陝西省図書館、西北大学図書館、および西安碑林博物館、陝西省考古所などに通い、あらゆる書法に関する書籍を読み、二十万字の《中国書法全集目次》を書き上げた。

また《中国書法簡史》を執筆し、一九七九年より西安美術学院（美大）が発行する《延安画刊》（雑誌）に連載した。一九八三年に単行本として《中国書法簡史》を出版（河北美術出版社）。表紙は沙孟海翁が題字した。《中国書法簡史》は再版し、六回増刷した。その後、鍾明善氏は《中国書法簡史》に歴代書論や最新の資料を補充し、書籍名を《中国書法史》に改めて二〇〇一年に刊行（河北美術出版社）。多くの読者に読まれ、再版三回、増刷は十一回に至った。

《中国書法史》は、日本では現代書道の巨匠・今井凌雪氏、ならびに門人である中村伸夫教授の連名で翻訳され、『書道研究』誌（美術出版社）の創刊号（一九八七年）から連載された。先日、連載の翻訳者・中村伸夫教授に電話で感想を聞いたところ、「書論が適確に引用され、分かりやすく解説されていることにとても感銘を受けた。翻訳で苦労したこともあったが、よい経験になった」と述べた。

その後、《中国書法史》の日本語版は、美術新聞社（萱原書房）にて七分冊の単行本として刊行中（鍾明善著、中村伸夫訳、萱原晋補訂）。鍾明善氏は日本に招待され、発刊記念講演会も行った。

二〇一七年、近年に出土した秦の封泥、漢の長安城桂宮の石灯の銘文、《北魏華陰楊氏宗族墓誌》《李商隠撰書・王翊元夫婦墓誌》など、未発表のものを多く掲載し、図版を三百点あまり増補した《中国書法史》の新版を出版（陝西省人民美術出版社）。韓国でも翻訳され、書道雑誌で連載されているそうだ。

一九四九年に誕生した新中国で、最初に出版された中国書法史に関する鍾明善氏の著書は、このように益々充実し、幅広く愛読されている。中国書法史研究に対する鍾明善氏の貢献は絶大で、国内外に書法史の権威として敬仰されている。

于右任の著名な研究者

于右任の名前を覚えたのは、前述の通り、咸陽中学校の時代の校長先生の影響だった。八〇年代の鄧小平氏の改革開放路線により、政治ばかりではなく、文化や歴史を対外的に宣伝するようになった。西安交通大

『中国書法史』の日本語版発刊を記念して来日。写真右3人目から翻訳者の中村伸夫氏、鍾明善氏、祁碩森氏

鍾明善氏一行の来日を歓迎する高崎書道会との記念写真。高崎書道会とは于右任を縁に結ばれ、長い交流の歴史を持つ

中国当代11.indd 103 2019/10/09 20:16

草書《于右任句》

白頭閲盡人間劫　再写乾坤正氣歌

学で非常勤講師を務めていた鍾明善氏は、一九八一年に于右任を紹介する文章を執筆するよう上層部から依頼された。本格的な于右任研究のスタートとなった。于翁の故郷に行き、于翁と親交があった方々にヒアリングをし、また高弟・胡公石氏らを訪問し、人情味溢れる生々しい于右任像が生まれ、鍾明善氏が執筆した紹介文は北京放送で海内外でも放送された。

同年十月、浙江省紹興市で開催された「第一回中国書学学会大会」において、鍾明善は「試論・于右任の書法芸術」を発表。翌年には中書協機関誌《中国書法》に掲載。また日本語版《人民中国》の一九八二年一〇号で「鴛鴦七誌齋蔵・魏の墓誌書法芸術」、十二月号で「于右任の草書芸術」を発表し、日本の読者にも当代書の偉人・于右任を紹介した。

ちなみに「鴛鴦七誌齋」とは于翁の書斎名である。二十世紀初頭、于右任は散佚の危機にあった古碑を蒐集した。総数で三八七基の石碑は漢から北宋までのもので、中でも南北朝時代の北朝最初の王朝・北魏の七王族夫婦の墓誌が最も貴重であり、美しく書かれたその六朝楷書に傾倒した于翁は、「鴛鴦（夫婦）七誌齋」を書斎名にした。その後、戦乱に巻き込まれ、個人で保管し続けることが難しくなった。一九三五年、陝西省教育庁に寄贈し、現在は西安碑林博物館に保管され、一部展示されている。

鍾明善氏は引き続き于翁の研究を進めた。一九八四年には、香港の雑誌に「于右任先生の書法芸術」を発表。《于右任書法選》を編集し、一九八七年に出版（北京人民美術出版社）。同年、「陝西省于右任書法学会」設立準備会に加わる。一九八七年十二月二十二日の設立大会は陝西省政治協商会議礼堂で行われ、顧問に習仲勛（副総理、習主席の父である）など、名誉会長は于翁の婿・屈武氏、会長は范明氏、筆頭副会長に鍾明善氏と、本格的な学会が発足した。現在は各地に支部もできて、七百人規模の学会にまで成長した。

学会発足のニュースは国内外に報道された。早速、日本人弟子の金澤子卿氏が動いた。氏が会長を務める高崎書道会は、翌八八年の春、学会との共同開催により、西安にて「第一回于右任書法流派展」を開催。台湾の于右任の弟子や孫弟子、および研究者も参加した。鍾明善氏は、金澤会長が率いる四十五人の代表団を西安に迎え入れ、その際、群馬出身の元総理大臣であり、書も嗜んだ福田赳夫翁を名誉顧問、金澤子卿氏を顧問として学会に受け入れた。

一九八九年、鍾明善氏は、于右任生誕一〇〇周年に合わせて、三つの記念行事を企画した。第一に、五月に西安市広仁寺で学会会員書法作品展を開催。第二に、于右任「草書千字文」の手本を三秦出版社で発行。第三に、「于右任先生生書法展」の開催。日本人于右任研究者の西出義心氏を団長、二宮柏竜氏を副団長とする訪中団も迎え入れ、日中の于右任研究者が集い、生誕一〇〇周年を最高のムードに押し上げた。

一九九一年、柳原書店が出版する《于右任書法集成》に「一介草民、一代草聖――于右任先生と彼の書法芸術」とした題名の序文を寄稿した。

一九九四年、鍾明善氏は陝西省于右任研究会会長に選出。同年、国家文物局が主催する中日書法史論シン

中国当代11.indd 104　2019/10/09 20:16

ポジウムに参加、「晋写本三国志の書体について」を発表。一九九八年に《書法報》（新聞）に「于右任書法流派掠影（スナップ）」を寄稿。

二〇〇四年、于右任生誕一二五周年記念・国際書法招待作品展を成功させ、同年七月、鍾明善氏は中国共産党陝西省委員会の段取りで江沢民国家主席に謁見し、江主席は鍾明善氏の文化および交際交流における功績を讃えた。

二〇〇五年九月に来日。陝西省于右任書法学会長として、于右任の日本人弟子・金沢子卿氏の八十歳記念展に参加し、祝賀会で記念品を贈り、祝辞を述べた。記念会場では福田康夫元総理とも親交した。二〇〇七年に著書《于右任書法芸術の管見》を出版。同年に「陝西省于右任書法学会設立二〇周年記念展」を主催し、代表として祝辞を述べた。二〇〇九年二月、于右任生誕一三〇周年記念として「于右任民主革命思想尋繹」

2014年11月、『于右任全集』発刊座談会が行われた（北京・全国政協ホール）。于氏の末子・中令氏と記念写真（左２人目より、鍾明善氏、于中令氏、祁碩森氏）

を大学の広報誌に発表。翌月に《中国書法》（雑誌）に転載。その間、南京の標準草書学社の胡公石氏、尉天池氏、台湾中華標準草書学会との連携も重視した。

さらに于右任の書法や詩文の研究の成果として、《于右任書法全集》を編集・出版。同全集は鍾明善氏が主編を務め、祁碩森氏、王勁氏らが副主編、三十数名の于右任研究者、書法家が編集委員会を構成し、委員長は蘇士澍氏が引き受けた。蘇氏が名誉社長を務める文物出版社が発行。台湾を含む国内外の于右任研究専門家を結集し、事務的な作業は副主編・祁碩森氏をはじめ、鍾明善氏に師事している院生や博士が手伝い、前後に十三年間の歳月を要した。全集は六六〇〇ページ余で、于翁の各時代の代表的な作品二六〇〇点を収録し、三十六巻にまとめられた。現在でも最大と言われる個人の作品集である。

二〇一四年十月に発売、三万三六六〇元の高額にもかかわらず、売れ行きはよかった。于右任ファンの筆者も一部を購入し、特注の段ボール箱に入った藍色糸綴じ全集が届いて以来、日々愛読し、常に臨書をしている。

鍾明善氏は副会長、会長を歴任し、現在は終身名誉会長となり、学会実務は弟子である常務副会長兼秘書長・祁碩森氏らにバトンタッチした。于右任書法の顕彰や研究を推進していく方針は、緩むことなく継承されている。

省書協の設立準備に参加

一九七九年、鍾明善氏は中共陝西省委員会宣伝部の指名により、陝西省書協の発起人となり、陝西省美術協会内の書法を専門とする数名の役員たちと連携し、「陝西省書法篆刻研究会」（陝西省書法家協会の前身）の準備組を発足した。最初の会合は「新城黄楼」で行った。これは研究会の高い格式の象徴といえる。「新城黄楼」は一九二七年に馮玉祥将軍が建設して「督軍署」として使用し、後に楊虎城将軍の官邸になった。一九三六年に蒋介石を軟禁し、天下を震撼させた「西安事件」は、ここで起こった。現在は修復され、陝西省行政会議堂となっている。ここで開催された準備組の初会議で、鍾明善氏は満場一致で組長に選出された。一九八〇年三月、省の政治協商会議ホールで正式に設立大会を行い、鍾明善氏は設立経緯を報告した。書画の分野で全国に知られている巨匠・石魯氏が会長で、鍾明善氏は常務理事兼秘書長に就任した。

一九八一年、北京で開催された中書協設立大会に、陝西省より鍾明善氏を含む五名の代表が参加。大会で啓功氏が述べた、「今日、設立された書協は、書法に携わるものの家だ。人民のために奉仕することは、皆の責務だ」という言葉は、行動の指針として今でも記憶に深く刻まれている。同年、陝西省書法篆刻研究会は、中国書法家協会陝西省分会に改名。鍾明善氏は引き続き、常務理事兼秘書長を務めた。

鍾明善氏がまず国展の出品対策に取り組んだ。分会会員を集め、研修会を行い、陝西省の出品数および入選数を押し上げた。鍾明善氏自身も一九八二年の第一回全国書法篆刻展覧に入選。八五年、中書協の代表会議に出席し、理事に選ばれ、また八六年には同書協の学術委員会委員に就任。九一年、中書協の設立一〇周年の記念行事として西安で開催された「国際書法書学交流会」を主催。

書法文化に対する貢献や組織力等が評価され、二〇〇〇年、鍾明善氏は第四回中書協代表大会で副主席に選出された。一貫して書法は民の文化だと強調。いわば「雅俗共賞」の方針で、多くの人が鑑賞できる書法芸術を推奨したのだ。それは于右任が晩年に提唱

中国当代11.indd 105 2019/10/09 20:16

《竹石図》

した「易識、易写、正確、美麗」という「標準草書」の四原則の精神に一致するものである。

美術品の寄贈で大学博物館を

前にも述べた通り、西安交通大学の人文社会科学学院の創設にも尽力した鍾明善氏は、学生の教育や研究の助けのために同大学の博物館の建設にも全身全霊を注いだ。鍾明善氏は学術や書道の交流で外国の大学との交流を頻繁に行う中、世界的な名門校は校内に博物館を持つことが多いと知った。西安交通大学に博物館を建設することが宿願となったのである。

鍾明善氏は半世紀にわたり蒐集した数千点の美術品や書画を、交通大学に寄贈した。寄贈品の年代は、新石器時代から唐時代に跨がる。土器、陶器、瓦当、三彩陶器、粉彩陶器、および漢画像石、墓誌など。春秋戦国の青銅器、戦国秦漢の璽印、漢の銅鏡、漢の石彫刻。六朝・隋唐の石碑は貴重なものばかりだった。また《大唐李商隠書・王翊元夫婦墓誌》《大唐韓択木書・寿光公主墓誌》《大唐徐浩書・崔公墓誌》の三碑は、国の一級文物（日本の国宝、もしくは重要文化財に相当）に認定。さながら「価値連城」（価値は城に相当する）の如しである。

西安は古都で文物が溢れている。鍾明善氏は若い頃から骨董市場や古美術店に足繁く通い、書法関連の文物を中心に蒐集してきた。著名になった古希以降は、弟子や業者による持ち込みも多くなり、中でも《大唐徐浩書・崔公墓誌》はかなり高額での取引だった。

大学は、鍾明善氏の寄贈を熱烈に歓迎した。寄贈品を陳列する大学博物館の建設は二年の歳月を要し、二〇〇四年九月にモダンな大学博物館が竣工。鍾明善氏は初代の博物館館長に任命され、学芸員や大学生を率いて所蔵品を分類・整理した。所蔵品の「文化的な意味」「芸術的な真価」「表現手法の特徴」「美の所在」の四つのポイントを押さえ、研究業務が遂行された。特に石碑や石幢については、撰文者、書写者、碑文、幢文の調査、年代の考証を徹底的に行った。

二〇〇六年、交通大学の創立一一〇周年、西安移転五〇周年に際し、鍾明善氏は、個人蒐集の砦ともいえる最後の六百点の美術品を追加で寄贈した。寄贈の累計は三千点の大台を超えた。

かつて于右任翁は民国時代の戦乱によりやむを得ず、蒐集した三八七基の石碑を教育局経由で西安碑林博物館に納めた。今日、于右任研究の第一人者である鍾明善教授は、于翁の精神を継承し、古代の石碑を中心とする三千点の文物を喜んで西安交通大学に寄贈した。この壮挙は大学内外で敬服され、詩人で著名な書家であり、農水次官などを歴任した趙学敏氏は「漢民族の精神の故郷」と書（題字）にして、寄贈品の文化的な価値を高く評価した。

思いがけずに入った書法の道だったが、全身全霊で仕事や芸術に取り組み、ついに中国一の名教授、書法史家、そして書法大家となった鍾明善氏。書法の道を歩む者の手本として、鍾明善氏を心から讃えたい。

郭同慶 かく・どうけい
書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に来日。王蘧常、銭君匋、方世聰、蕭海春に師事。二〇一四年度に上海（朶雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で作品集《墨海一粟》を出版。翰墨書道会長、東京藝術院名誉院長、東京海派書画院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、日本王蘧常先生顕彰会会長、豊道春海顕彰会顧問、日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海中国書法院名誉院士、上海呉昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事などを兼ねる

中国当代11.indd 106　2019/10/09 20:16